

9 母の生まれた年に建造された巡洋艦での戦いと 広島への原爆投下

杉山 孝夫（りぶりんと・長浜 87歳）

『ひろしまのピカ』いかがでしたか。これから、おじいさんの子ども時代のお話をします。

おじいさんは、15歳の頃、海軍一等水兵として、広島県の呉軍港で戦争を体験しました。



記録のえほん『ひろしまのピカ』

丸木俊 文・絵／丸木位里 協力
小峰書店

「ピカは、ひとがおとさによおちてこん」。日本で初めてM・L・パッチェルダ賞（アメリカ図書館協会）を受賞。15カ国で読み継がれています。第3回絵本こっぼん大賞/よい絵本/第27回課題図書。（出版社HPより）

- 発行：1980年6月25日
- ページ数：47ページ
- ISBN：978-4-338-02201-9

物心のついた頃から、十五年戦争ともいわれた軍国時代を肌で感じながら育ち、平和を口にするには利敵行為と戒められ、身を捨てて国に殉ずることが最高の道徳と教えられました。私が海軍志願兵として広島の大竹海兵団に入団したのは、戦争も末期に近い昭和20年1月末、15歳と3カ月のときでした。この1月に、日本が占領していたルソン島に米軍が上陸したと伝えられ、本土決戦が間近に迫っていました。

この時、私はすでに郷里を離れて兵庫県の川西航空に集団就職をしていました。工場では海軍の戦闘機「紫電」の増産に追われていましたが、寮長の山本さんから「産業戦士から今度は帝国軍人だ、立派に国のため、戦って来い」と入団令状が手渡されました。その言葉は厳しかったですが、眼鏡の奥はやさしく光っていました。

もちろん、寮でも職場でも送別会などはありません。それでも職場では、旭日旗に「武運長久」の文字と海軍中将の副社長の名前が大書された寄せ書きを持たせてくれました。この寄せ書きと寮長の励ましの言

葉を後に、10か月振りの帰郷の途につきました。下の弟や妹に何の手工産も持たずに帰るのが、たまらなく淋しかったです。

父は急ぎ特配の酒を求め、母は山菜や干物で、ごく内輪で「出征」を祝ってくれました。父も母も「なぜ海軍なんか志願したのか」など一言も言いませんでした。この年も大雪で、氏神様の前での挨拶もそこに、高学年の生徒だけの「兵隊送り」と村はずれで別れた後は、親戚の人に助けられながら8キロの雪道を歩きました。最寄りの中ノ郷駅（現在は廃駅）に着き、「大丈夫か」と案じる父に「大丈夫」と車窓から手を振るも、発車の汽笛に思わず涙があふれて止まりませんでした。集合場所の神戸駅までは一人ポツチでした。神戸からは下士官に引率され、広島県の大竹に着いた時刻は定かではありません。

翌日の身体検査では、係官から「即日帰郷」を告げられました。体重43キロの貧弱な身体を案じての配慮に、私は「お願いします」と哀願し、許されて海軍二等兵となりました。厳しい訓練にも耐え、3カ月の新兵教育を終えると配属が決まり、巡洋艦「磐手」に一等水兵として乗組を命じられました。そして5月5日、呉軍港に停泊

中の「磐手」に乗艦しました。奇しくもこの艦は母の生まれた明治34年（1901）に英国で建造された装甲巡洋艦でした（初めて乗艦した日は母の44歳の誕生日でもありました）。この日から猛訓練は次第に実戦の戦闘配備に…そして応戦。初戦は6月

22日、B29大編隊の呉海軍工廠への絨織爆撃でした。7月1日、B29呉市への焼夷弾攻撃で大火災。さらに、7月24日、300機を越すグラマン機が帯状に数群に分かれて各艦に急降下し、その一群から四機一編隊が「磐手」に機銃掃射を浴せながら爆弾を投下、引き続き後方からも…。これに応戦するも遂に被弾し、浸水した艦は着底しました。その後、安浦海兵団に転属となり、8月6日、広島に原爆が投下されました。広島への救援隊出動の直前に別命があつたため、私は一人の被爆者も助けることができず、70年後の今も心の痛みは疼き続けています。

『ひろしまのピカ』は、画家の丸木俊さんが、広島への原爆投下、戦争への怒りと鎮魂、そして平和への願いを込めて描いた本です。余談ですが、「磐手」は44年で没しましたが、母は平和のお陰で90歳の天寿を全うすることができました。